学級委員になって

昭和五十四年度　四年　男児

ぼくは、五十四年四年一組の後期の男の学級委員に選ばれた。選ばれた時、きせきが起きたか、ゆめをみているのかのどちらかだと思った。

ほんとだとわかった時、こんなぼくみたいなばかな人がなるなんてと思った。

家に帰って最初にそっと母に言った。母は、

「えーっ。」とおどろいていた。母にみんなにひみつにしておいてとたのんでおいて、夜になってから父と姉に話した。父はなんにも言わなかった。

十一月までやってみて、学級委員はいろいろな仕事をするんだなとわかった。たとえばあいさつの号令や、みんなをならべたり、しょく員室からドリルやテストを持ってきてと先生から言われた時持ってくる。

ぼくは大声でさわいで先生から、「学級委員だろう。」と何回もおこられる。学級委員なのにろう下を走ったこともある。

ぼくの学級委員はまちがっている。学級委員は頭がいい人がなるのに、なんで、ぼくがなったんだろう。ふしぎだ。学級委員は大へんな委員だ。どうしてぼくがなったんだろう。

十二月、一月二月三月と学級委員の日にちがあるけど、大てい一月ぐらいでくびになるかもしれない。でもくびになったらかっこ悪いから、なるべくならなくしなくちゃ。ぼくが、くびになるかもと先生に聞くと、

「ぜったいくびにしないよ。その代わり、きたえるぞー、楽しみだー。」と笑っていたけど本当かな。

父や母の知っている大人の人から、

「おっ、えらいね。学級委員で。」と何回も言われた。

「でも悪い学級委員だけど。」とぼくは言った。

ぼくはいい学級委員になりたい。大声を出してさわぐのは出さなきゃいい。けれど毎日やっているから、くせになっていて直すのは大変だ。それでも学級委員になったから直さなきゃならないのだ。ぼくにみんなが投票してくれたからなれたんだ。それだからぼくは学級委員になれるというしょうこなんだ。さわぐのは直せるというしょうこだ。

今は学級委員になってよかったか悪かったかというと、自分ではよかったと思っている。そのわけは、大人になってからいろんな人にむかしの話をするとき、「学級委員になったぞ。」とじまんができるからです。もう一つは一生のきねんになるからです。

ぼくは本当の学級委員にならなくては。